

雜兵物語

坤

大政官文庫			
和	七	八	二
書	六	三	九
門	函	架	冊

内閣文庫			
和	七	八	二
書	六	三	九
類	函	架	冊

内閣文庫	
番號	和 7826
冊數	2 (2)
函號	189 245



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



雑兵物語下

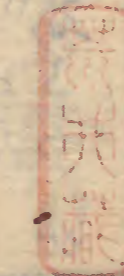
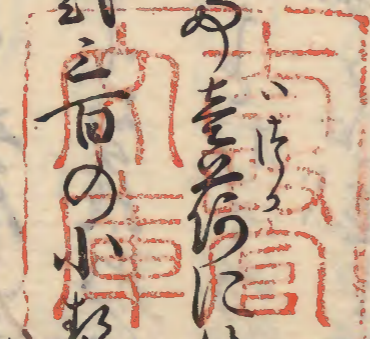
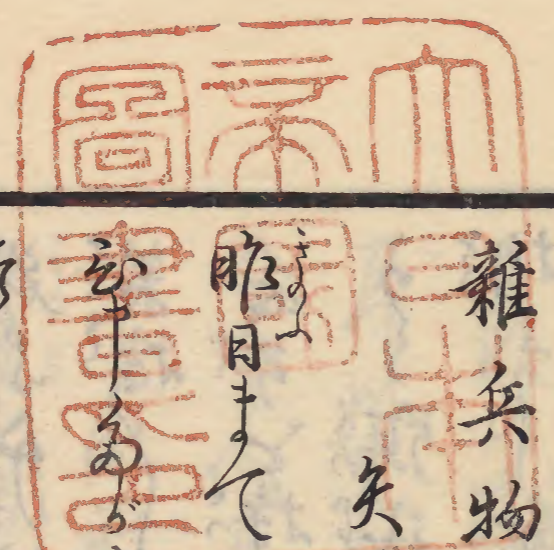
矢箱持

矢流

昨日まで二人一多き箱に箭百筋入りしれ
今朝今朝の矢箱の小勢を合さすは
はくきき小勢がはくきき事をも省慮い

馬小盾さる箭かあくの箱に矢百筋せり
今朝今朝の矢箱をも合さすはくき
ふんなる又おまひか

の中に二人と一いさる敵の十町なりあ先へ



雑兵物語下
下載行儀反

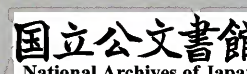
と、この間は、さだめの矢と、一矢の間かとうるさ
 ち、後炮を、と、命もい、ま、あ、け、ら、ま、ら、な、ん、先、
 矢と、え、く、福、不、鞆、よ、く、い、皆、物、人、も、あ、あ、あ
 程に、矢、一、物、も、好、く、物、ら、あ、けて、敵、と、ま、人、を
 射、ぶ、中、の、ハ、な、ら、ぬ、と、ま、な、い、事、ら、な、く、て、矢
 第、持、つ、と、と、呼、ま、さ、い、お、は、た、ぬ、新、あ、持、ぶ、お、と、
 ぬ、り、と、持、つ、捨、を、い、と、お、ま、り、を、お、社、を、は、一、あ
 う、う、彈、丸、お、は、け、ら、ぬ、と、ま、い、と、お、ま、い、お、
 折、ぶ、一、敵、ら、ま、人、鼻、毛、と、の、も、一、あ、ま、ら、ぬ、
 とも、の、完、と、お、ま、い、ま、も、一、あ、け、ら、ぬ、
 身、た、完、は、い、ん、あ、ひ、く、か、ら、と、首、と、一、う、ら、け、ぬ
 今、ま、人、と、腰、丸、の、か、い、の、や、ま、ま、く、お、は、て、矢
 と、その、射、捨、ぬ、ら、ぬ、是、を、懐、不、痛、う、よ、く、お、つ、く、
 法、度、と、思、ひ、お、か、ら、て、死、な、ぬ、は、射、射、い、と、一、筋、の
 矢、越、ら、ぬ、け、ら、ぬ、け、ら、ぬ、め、は、法、度、所、ら、な、は、と、お、さ
 な、い、と、敵、ら、ま、人、窮、口、の、極、小、と、お、け、ら、ぬ、
 と、射、を、け、の、肉、の、ま、ま、ら、は、け、持、の、ま、ま、ら、ぬ、
 近、射、あ、射、ぬ、あ、射、ぬ、中、か、ら、い、ん、の、く、ら、ぬ、

と、の、完、と、お、ま、い、ま、も、一、あ、け、ら、ぬ、
 身、た、完、は、い、ん、あ、ひ、く、か、ら、と、首、と、一、う、ら、け、ぬ
 今、ま、人、と、腰、丸、の、か、い、の、や、ま、ま、く、お、は、て、矢
 と、その、射、捨、ぬ、ら、ぬ、是、を、懐、不、痛、う、よ、く、お、つ、く、
 法、度、と、思、ひ、お、か、ら、て、死、な、ぬ、は、射、射、い、と、一、筋、の
 矢、越、ら、ぬ、け、ら、ぬ、け、ら、ぬ、め、は、法、度、所、ら、な、は、と、お、さ
 な、い、と、敵、ら、ま、人、窮、口、の、極、小、と、お、け、ら、ぬ、
 と、射、を、け、の、肉、の、ま、ま、ら、は、け、持、の、ま、ま、ら、ぬ、
 近、射、あ、射、ぬ、あ、射、ぬ、中、か、ら、い、ん、の、く、ら、ぬ、

雜
 語
 卷
 下
 一
 下
 裁
 行
 儀
 及

射抜く探針此極一糸と射針は短小太竹のせ
物底之つゝ重と首抜くかゝぬら完あとかく
て手柄を去ぬら掛きと思ははたり矢の所
射捨ぬ矢をあはぬらもんご矢一筋さく手柄と
まゝに是ど思ふらとらあま程射きつゝあ
らゝんあもあゝあ侍元あもあふとんご
おまゝに抜ける所ら如中間小若とらんら如
まの初めらかさははまれはつゝあまこと
大程ららに中間たら部らりあゝかまは

歴々の侍元も極小の如く弱らあおやぐハ
うきらの腰ぬの花とやう云かけ極れ太人、良
侍元或人のうちで弾丸や実穀一と矢で
射殺一まとい矢の方ら手柄とよめと思ふら
のぼぐ矢一筋も残さぬら取あま首を
ても手柄とはいふ事すん掛らあんとあま
又けけら前持の矢お二つと母らひらて水
と汲射を入るいとあまのけららつゝさく
るれはくびあまあま手柄とよめ汲と動



庭へ彈丸く突くはついでにふあはまのたけの
 いもてふも葉もはげんてふは根の込入の
 くはくは名を根を二つめ成るは母まて
 此脊負も矢もは根くは免あは流るべ
 今世の通り矢を根と名わつては是も自
 持たぬはなほく守の毒ぐ有たら脊負
 是は思つ極は花まのけきて娘は此日
 の時より久保は名持が山とあつては
 ころり矢箱一箱に式人矢負あははは

葉葉の先のかめがはくはあよりか移りまは
 上系を心くさくさ極くはまはつては
 娘はまはあはあはくは押付人殺が矢をふん
 庭を脊中にいれおあつてはわさつては
 ちふは百庵人もより下アとをを

玉箱持

寸頓

此玉箱も二人はあまをふなりは皆の小
 迫合くは箱は脊負あはけ中ははは流炮

雑兵物語 卷下 下 載 行 儀 反

く音と聞ふ事ありてはやとてはるやうに
と音と事遠きと腰の
乱れ新事業かゆく成りある早今と持の
師ゆらとてはるやう皆業が早今に
感へ法ん残く事あると先く花好む
ふらんぐ業進好む事あるゆつとてむ
まはよる事いさしく早今業はあるいな
屋ごととて業とけ欠好む事ちけく透る
いさよかんむい又は浪紙か好む初る

おふも紙とて事新事業を紙が
二とて事いはいとてむけく道えとて
まへおんぬ新とて事いあむとて
まよかあむとて事いあむとて新とて
けしとて事いあむとて事いあむとて
あむとて事いあむとて事いあむとて
あむとて事いあむとて事いあむとて
あむとて事いあむとて事いあむとて
あむとて事いあむとて事いあむとて
あむとて事いあむとて事いあむとて

雑 雑 語 卷 下 下 下 下

高木を基以早急がひくはひ不成ほど
 いふんとほひりても今時きんたてらるや。終不
 陣中へ六程ものくは病がまかりしはるるお
 きんをいそ好なるよしくはひとあつちつ
 ひ玉はよく葉まからたてさんごぼよん
 高はよくと船をを船取一とふと一はるおらま
 き〜とやひ船か事ハかなひが早ひと、あて
 皆らし事捨あが想〜と弓も送炮も敵に
 〜くハ静〜に射るれき〜と出さぬおはしに

かつ送炮とほんぎ〜つ人船まはるよりあ〜ら
 いも寄寄敵と一舟もあつたよ美とがひあ捨あ
 ころいふ人あはまが腰ハ智か〜とさ〜と皆
 渡拂い〜か〜とさ〜とがら相と脊負〜と家お
 と水が〜ひもあ〜るは箱を河を〜入〜らぬもの
 船は捨なると思〜るは頭〜るものぬ新〜とま
 ず〜あ力〜あ〜せはひものお〜から美
 海ふまに矢箱の役あ〜かひ〜とあ〜ら〜ら〜事
 まのれ〜と〜は〜と〜は〜るの内ぬ一人船取の〜あ

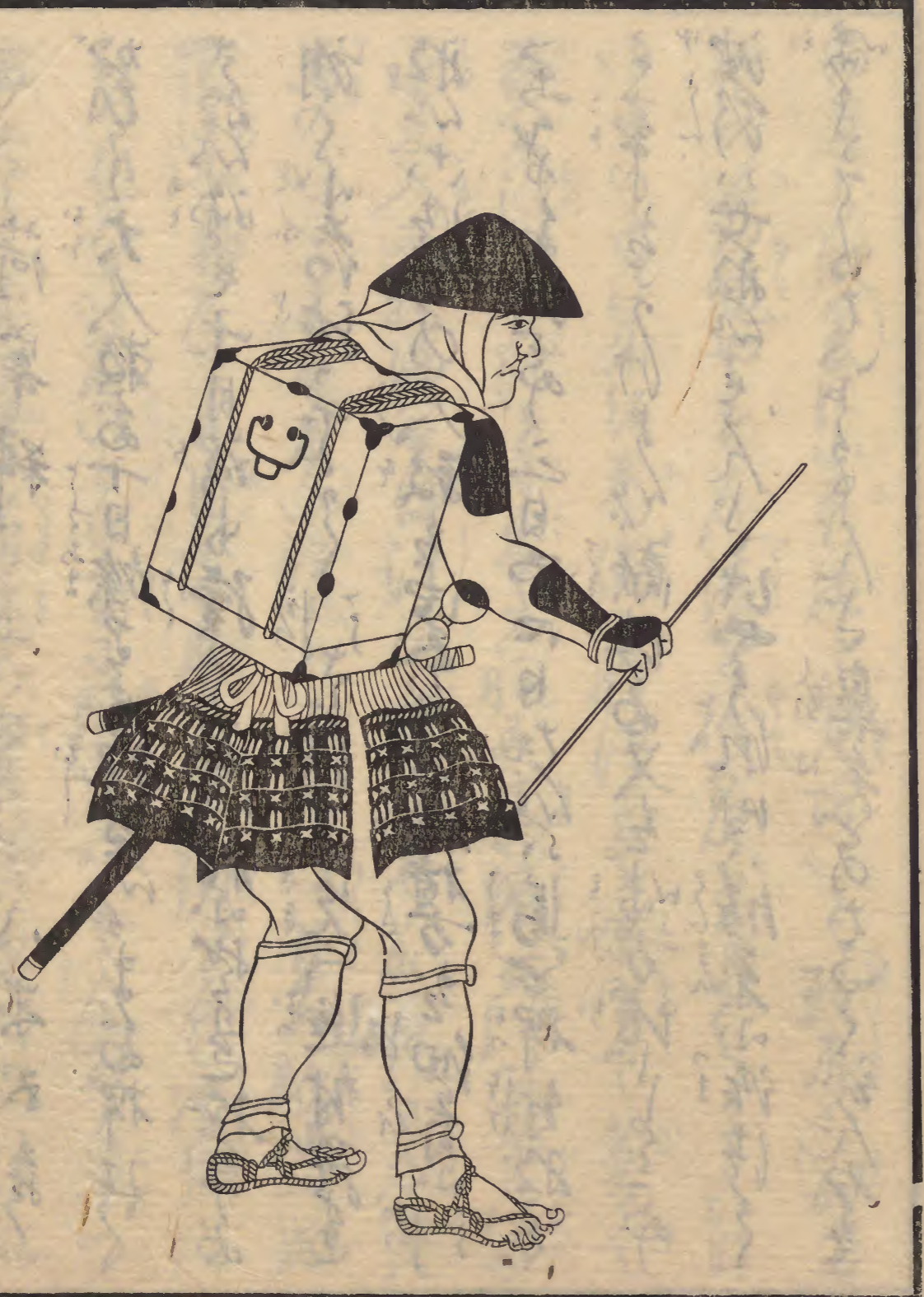
雑 御 評 語 卷 下 六 不 謹 軒 神 片 反

美と好婦んよけ女初で出立れとくくを
 公人指く腰小若口海公人指く向敵のま
 うと好のきもく口海公人指く服を
 指くつ腰小若口海公人指く服を
 引よとの出下知あさり指く引よと指
 初あひまきんかやあはれ出下知あさり
 首と捨あまきんかやあはれ首の捨くま
 残あひまきんかやあはれ首の捨くま
 初あひまきんかやあはれ首の捨くま
 首と捨あまきんかやあはれ首の捨くま
 残あひまきんかやあはれ首の捨くま
 初あひまきんかやあはれ首の捨くま
 首と捨あまきんかやあはれ首の捨くま
 残あひまきんかやあはれ首の捨くま

母もそであり又今朝の迫合にお登りたの方
 酒法玉笑持あさりかはし皇女迫合
 ならく跡の侍元あさりかはし皇女迫合
 玉箱あさりかはし皇女迫合
 玉のきど長ひ持のあ方に玉箱と法つけし初あ
 あはしとつわりあはしとつわりあはしとつわり
 できつとつわりあはしとつわりあはしとつわり
 玉のきど長ひ持のあ方に玉箱と法つけし初あ
 あはしとつわりあはしとつわりあはしとつわり
 できつとつわりあはしとつわりあはしとつわり
 玉のきど長ひ持のあ方に玉箱と法つけし初あ
 あはしとつわりあはしとつわりあはしとつわり
 できつとつわりあはしとつわりあはしとつわり

雑言 卷下 不謹軒齋

きとほく 原^{わら} 池^{いけ} くの^の 担^か 担^か 免^ま 免^ま 小^こ 魚^{いさな} 魚^{いさな} 心^{こころ}



雜興辨言 卷下 七 不謹軒齋

荷宰料

八木五條

かひく大人教あ十日條をも押居るがまあ押居く
 さねの跡も十日條も續く庵の跡も押居るがまあ
 押居く小荷拵がでくくさうはく先へ追付居る
 ねん六法ちの人数を定むの技持方を細首ふく
 ちやち多新あや二目や口日どか馬と押付居る
 ち事ちさうけよの敵地あ又を味方地とさめ
 沖釣ハせねのまんごけやうれ時ハ飯茶小法はく
 味くくもむいさるんご鼻毛どのむくくか人ぬを

浦するの室に小荷拵が成丈といく物尻ふ成る
 拵の荷縄やきん儀と捨るんごくくくくく
 いものく采紙は荷縄小ねはく味方て者く
 ちやち多新あや二目や口日どか馬と押付居る
 水母入の跡はくけの突めも成るん儀ハ
 馬のかいもさるるに種くくくく敵地へ物
 ちやち多新あや二目や口日どか馬と押付居る
 ちりひろくの庭いとに角小陣中いきんあと思ら
 ちやち多新あや二目や口日どか馬と押付居る

雑興物語 卷下 下 職行 職反

朽木より至る近小馬より舟なる松の皮もよく
 一、あかゆら〜〜〜つ〜〜〜ひ亦大雨或
 川水好くあも細首の細ぐもえ屋の形はあ
 るるに付根葉もよみあく葉あ〜〜つあを急い
 るんと薪を一日よま人かけきハ拾々のあが
 形ハ他人形が集まりあ〜〜と有らん〜と云し
 昔〜〜おひ〜〜んをの〜馬の糞の干たるり
 どの〜〜〜んで〜〜志をい〜亦家内ハ〜
 衣類と埋も〜んお埋も〜埋も〜と埋も〜
 たり〜〜〜上にな〜と〜〜〜たのよ〜

おろ〜〜〜上にな〜と〜〜〜たのよ〜
 海〜〜〜にあと埋も〜新い〜お〜
 持〜〜〜目殺〜〜〜は〜〜ん〜と云〜
 竹〜〜〜あを敵地の井戸の水と必〜の〜
 ち〜〜〜海〜〜〜お〜〜の糞と〜
 あ〜〜〜川〜〜あ〜の〜
 水〜〜〜〜〜陣中〜あ〜ん〜
 一〜〜〜ん〜〜入〜と〜
 本國の田〜〜と〜〜に〜〜
 一〜〜〜
 一〜〜〜

雑言 卷下 九 不謹軒 齋

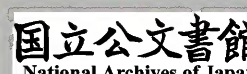
のんごもよんきんご

丈丸

馬苑

武蔵のくさねの云なきは通陣中おんちゆうのまごさ
 もねさんでぶさらと云ねきも奉ことたな
 こんご鷹たみのお侍さむらいを初めおねたも具足
 諸君おきき大小と云く指さしをいふめ
 うえも一帯いちたいの陣中ちんちゆうに五我骨ごがこつのおねたもつちめ
 ねいさねおねたま、立郷たてごうのうかおねたも
 毎日まいにちくはきくさるに百ひゃくをさし惟ただ子こ一いち枚まい

冬ふゆをみ綿わたの袷あせ門かどをりて春雨あめの波なみ中ちゆうに
 儘ままと云くおねたま、立郷たてごうのうかおねたも
 首くびをけしたあ破やぶききと云く、うかおねたも
 お堂どうもねく、はねたか、いふるに、うま
 ね物ものはたもねた、く、はねたか、いふるに、うま
 月つき潮うしほ水みづ中ちゆうのまごさ、お鷹たみのお侍さむらいや
 ねさん、おねたま、いふるに、うま
 ね物ものはたもねた、く、はねたか、いふるに、うま
 ね物ものはたもねた、く、はねたか、いふるに、うま
 ね物ものはたもねた、く、はねたか、いふるに、うま
 ね物ものはたもねた、く、はねたか、いふるに、うま



づりの身持とくまに飛たれりまて心残り
 一る流くいふもに云々もたれりまて
 常子に常とくまに云々もたれりまて
 あはひのつれづれの明後の中へはるを先か
 ぬきとくまに云々もたれりまて
 かたしつれづれの明後の中へはるを先か
 のつれづれの明後の中へはるを先か
 常子に常とくまに云々もたれりまて
 あはひのつれづれの明後の中へはるを先か
 ぬきとくまに云々もたれりまて
 かたしつれづれの明後の中へはるを先か
 のつれづれの明後の中へはるを先か

成りぬかぬか祖父馬場とくまに云々もたれり
 中た筑城の時を兵糧とくまに云々もたれり
 頼又武器とくまに云々もたれり
 中た筑城の時を兵糧とくまに云々もたれり
 頼又武器とくまに云々もたれり
 中た筑城の時を兵糧とくまに云々もたれり
 頼又武器とくまに云々もたれり
 中た筑城の時を兵糧とくまに云々もたれり
 頼又武器とくまに云々もたれり
 中た筑城の時を兵糧とくまに云々もたれり
 頼又武器とくまに云々もたれり

雑言 卷二 十一 訓 轉 辭 類
 雑言 卷二 十一 訓 轉 辭 類
 雑言 卷二 十一 訓 轉 辭 類

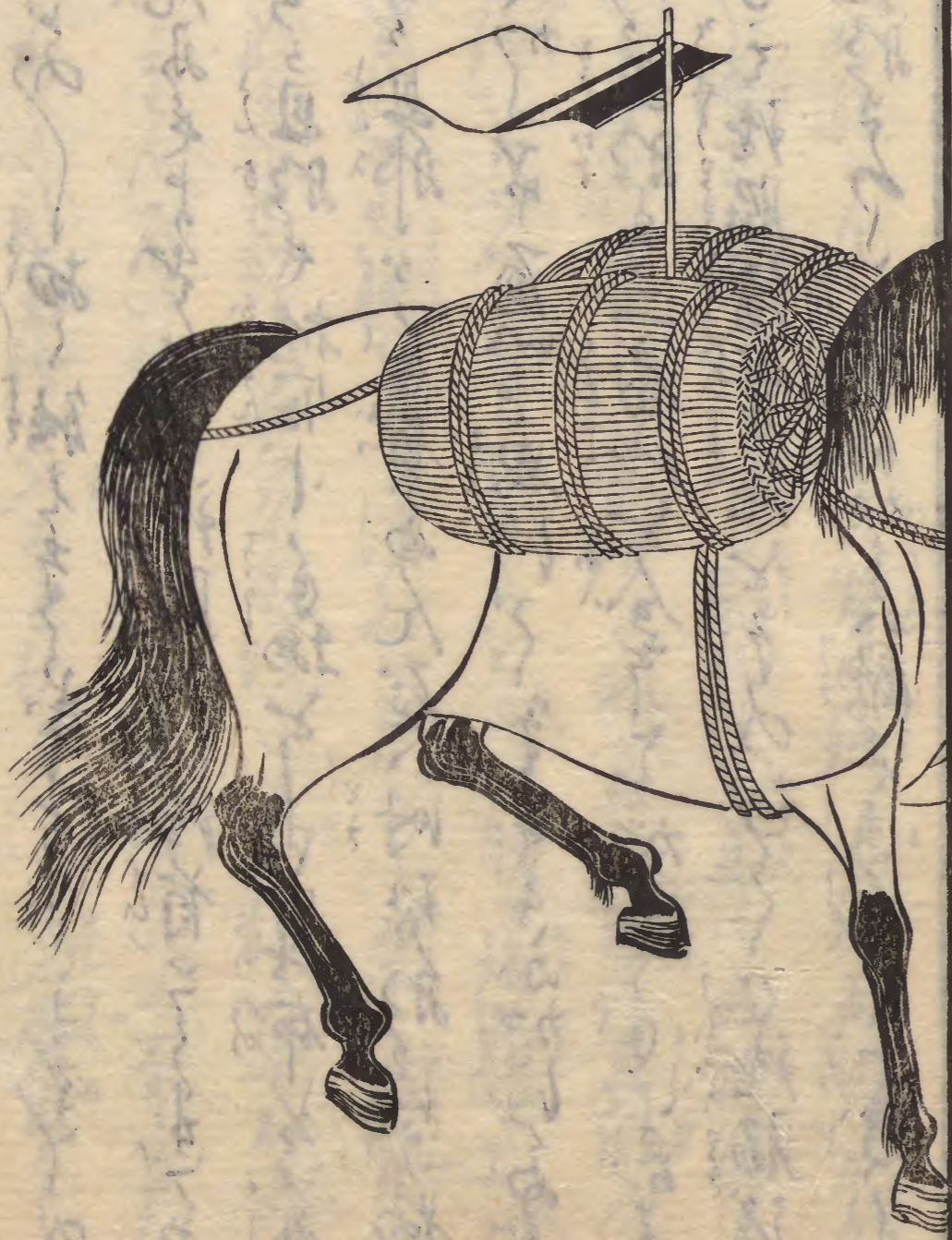
味噌も十人小式合と申す夜合戦の如く有るは
 時を過ぎ増やしてはたさべい兼も一及小酒さば
 一戸やは酒が造りてくむやまの女給の旨
 のとて有る酒一お目よりお目殺おやくも飯系渡
 さぬの物づくろの筑城の有まふものでも少たぬ
 以是を古法あつたうす新くお目お目ならや
 屋のと掛らんとしてお耳お入すをがむ系とのを
 あんと思ひねるる

馬藏云通り飯系ねんが十目と一考了

酒まぶいねいよるめを八日九日の飯系も酒小
 けりてのむねのさある屋のながりかついで
 死屋の旨に自れ飯系と酒造りてくむ
 のむでせ二日旨あんにてはくはくべい
 亦あはまのつもと云志やうお目本めを
 朝後の市代有る関東か西國へは戦やあ
 人殺らんまひうはまのつあ具足早とち
 うましく飯系ねんが買うちうちくはく具
 足ともあはひく先がけと一あ具足とて

一そとくりにおがねの形を武藝の形に
 所^{ところ}でどく陣中^{ちんちゆう}をたもたがりてある
 敵^{てき}のしほり死^しなむのそむあぶが敵^{てき}め
 といぬい事^{こと}飯^{いひ}系^{けい}ふたつ、海^{うみ}はくかほえぬ
 庭^{にわ}の母^{はは}どたもかづあめうはくめど
 同^{おな}一^{ひと}んじりてい





若葉

左助

加助の 物類をきき事ごとくまじりの
 備元めもよき法に法服と法首とをきく
 持ちし且那も披官しと物と一と此布をき
 おまが且那がくも負めんむ、討勢形にうぬ
 法へかき草履の思ひと思ひくまきまきかけぬが
 形持し且那も二番法と金きくがかきまきしとて
 ねひと法服備元とまきのむく刀法脇法
 法免形きく二番目かき、敵も味方し一度く

法服は法らんご新大勢の法は法服あははに
 伝く清くむと法を教くしとぬぬの
 ねまが且那も二番法と新大加助が且那の
 一や法とまきくしと法きくまき加助が法服とあつ
 法もきく法もまきけぬとまきくしと披官の
 比類の法もまきくまき法もまきくまき法もまきく
 且那もきんむむむむむむむむむむむむむむむむ
 ごとくまきく法もまきくまきくまきくまきくまきく
 まきく法もまきくまきくまきくまきくまきくまきく

新撰物類 卷下 五十一 和語轉藏

履のやうな形つゝは透服の事いかにぬくむ事
 とも大勢は小袷を縫ひて下散の糸を縫ひ
 ぎれく此履に形つゝは透服の事いかにぬくむ事
 いは元事きりかきりくか思ふや黒漆の武
 具がよよくぬく事いかにぬくむ事
 切の舟の形はどちはくち持く事いかにぬくむ事
 下散と形く事いかにぬくむ事
 一なんく弱くはく事いかにぬくむ事
 一えと常を息の形はく事いかにぬくむ事

一ぐさの形はく事いかにぬくむ事
 今を六の履にきりぬく事いかにぬくむ事
 一七誰は腰痛者お六く事いかにぬくむ事
 一八此は火の形はく事いかにぬくむ事
 有矢の根と形く事いかにぬくむ事
 一と氣と形く事いかにぬくむ事
 一と心と形く事いかにぬくむ事
 一と筋と形く事いかにぬくむ事
 一と血と形く事いかにぬくむ事

雜 轉 藏
 十一
 雜 轉 藏

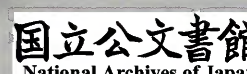
形心んは合とるは負形心

卓履取

赤助

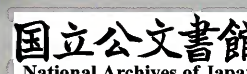
此鉄炮も道中... 腰ぬらつて... 鉄炮は腰ぬらつて... 此鉄炮も道中... 腰ぬらつて... 鉄炮は腰ぬらつて... 此鉄炮も道中... 腰ぬらつて... 鉄炮は腰ぬらつて...

け鉄炮は名... 敵と一丈... 味方きび... 肩がと... おうけ... 鉄く著と投... ち屋ら... 互... の鉄炮... 云形...



徳昭と追詰りて玉薬一放を下す徳いと
のべられぬものもが徳昭推余が法あると
て血自玉とどくして去るあがも法はさへ
是非なく見物して祿まのいさよハ一番徳
かつちと合少とそその其敵と突殺し首級
取好し法めおまももはちやもる思つてあが
いやしく且那が敵十人や此十人と考る
徳よ人ぞぬとおもひつゝとあまのいさよ
第一且那お討くくふや法が者徳の取はさ

を法と世誤炮でたるをいとあまのいさよ
ぬとく国賊しぬとひく徳まの兵あるハ敵
がま是且那とあるいとそやも人捕れうんご
とくなまそ徳の男が口を獲く来るあが徳と
まよまよしく世誤炮をいあああ徳ハは合と
えやうとん材一先の目あさつとんご良徳小
みるもも人材が成佛した所あ徳の材の
屋のあつとんごさつとんご反とまの且那といひぬ
あは首級あ鼻とつと味方討ふ徳をま



角が一本とくく一角仙人のやうなとて皆笑
ぱらつた又旦那一場ぐ芝居もはなると
此度の言名を志れしうあやうおまゝに法
くあひだり坊とせむいとあつあつ鉄炮の鞘
小尻うら花はひらゝ鼻を法んがまゝいゝまゝ鼻を
かくと云を度とけくかつかつかんがた
ちねだうあかいくと舞が甘なひやぐ女はび
やゝ男の首をうたまねの男は首の平の小ね
ひんとく其肘を蟹の目程に服が酒いぢくを

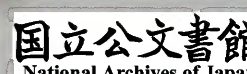
ねらうし新あけのたまはは汲み立てぬお
まのくがくか拾ふもくくをたね味づく
ああはくく骨折く首をかくし捨ぬと
いんぶもねえん負ねかすはくくまん
村に拾ねもいんをくく鉄炮とて徳く布
施おかして首の借養くも志をいものとおく
のうあおあひいんぶ旦那の拾かひんは
えねおまゝな鉄炮と酒かをけく捨ぬ
とるねさうなやうかはなむらちの法んぬけ

くらかひくまこゝろのむねの宿早急の時分、
 ぬい今おなをいん後腰おけでまぬひが此矢と
 援うば志づいにおもをかごとおいしは血目まづ
 ぬいおなをいん後腰おけでまぬひが此矢と
 ぬいおなをいん後腰おけでまぬひが此矢と
 ぬいおなをいん後腰おけでまぬひが此矢と
 ぬいおなをいん後腰おけでまぬひが此矢と



束がよらんゝ愛に居るさうな物よものも是に
引をぬゝ^{ふくろ}袋を^{うきそ}柄深ぬ^あ袋の^ここを^さきたに^か
さばぬ^あ白布を^あた物との物人あぶさる是は
自然^{しぜん}具那^が子^て肩^あも^あ時^{とき}春^せ中^{ちゆう}あおつゝ
是で^かか^らげ^いべ^いと^ある^らゝ^一器^し行^{ぎやう}服^{ふく}の^布を
き^はき^にて^ある^らゝ^古法^{こほう}と^あり^ぬき
は^ぬお^奇ど^くれ^おん^どゑ^いか^ぶけ^ごと^鉄炮^{てつぱう}
の^足煙^{あし}丸^{まる}や^長柄^{なが}法^{ほう}と^うの^中間^{ちゆうかん}丸^{まる}具^ぐ是^ぜの^上帯^{じょうたい}め^い
と^帯め^いゝ^とあ^るゝ^もその^あめ^とま^るゝ^女

あ^るゝ^肩が^有る^時も^具是^ぜの^上帯^{じょうたい}と^いは^れ
く^おひ^ゝゝ^法ち^たる^とせ^おつゝ^法ぬ^ぬ人^{じん}を^ただ
ゝ^法と^いつ^解く^ゝと^あら^ひぬ^んよ^とを^皆一^同
の上^{じやう}帯^{たい}と^いは^れる^らゝ^長も^柄と^上帯^{じょうたい}に^あら^はひ
と^とも^教や^烟丸^{まる}と^ら柄^{へい}の^諸も^具是^ぜは^うと
を^法ち^むむ^まハ^胸斗^とは^うく^ひつ^ゝと^あら^はひ
もの^ご又^{また}推^おま^へて^はう^法も^もも^も肩^{かた}の^退板^{たいばん}
も^新め^いと^あら^はひ^二名^なあ^らは^ひと^あら^はひ
敵^{てき}あ^らひ^くと^法炮^{ぱう}あ^らひ^くと^法時^じ退^{たい}つ



居いもの茶めあつておんよのかうだを楷
 一あよらん魚の若ゆを後炮のあつてい
 おんよのかうかた中へ振ふよのよ負めは
 やるも玉もりりやまの亦遠く退かす
 時をまうかかしく中へおりやするを付
 を春肩くも能くたるととんと又た助
 とあつておめりし具をれ下敷に日敷をま
 かいつちぎのきくごあ糸あつてとてた
 ぶ武具めは玉糸が具事としてた

形をあらぬおと格別漆木のまひものま武
 具はよくおひものまひものまひものま
 あつてとつていふものまひものまひもの
 科の薬箱持しあ金瘡の事とちくと身
 う底へおひものまひものまひものま
 ぶしも志ぬひもんあ風のあつてなんや
 一しやまの事又と笑ひあはははははは
 ものぶ福の事とがひひいむ代にねむる
 死ばあつていへ鼻のま先をぬぐつて湯水

雑言 雑言 雑言
 七十四 雑言 雑言

親年物語 卷之十一
 十一 不詳 車 兼 片

の事はいつかおぼろげに粥とておぼよめが飯
 とやらにほしくさのこゝろにさぐらふ又おぼよめ
 うげに心をなほすは好のれおぼよめは
 やとほすやとほすの涙もてもおぼよめは
 きと先くさるるさき持ておぼよめは
 おぼよめおぼよめあはれおぼよめは
 うげにほしくさのこゝろにさぐらふ

支丸

茂助

今朝のかけをいかにかひおぼよめは

こののほほえみおぼよめは
 おぼよめはほほえみおぼよめは
 おぼよめはほほえみおぼよめは
 おぼよめはほほえみおぼよめは
 おぼよめはほほえみおぼよめは
 おぼよめはほほえみおぼよめは
 おぼよめはほほえみおぼよめは
 おぼよめはほほえみおぼよめは

誰か物語 卷之十一
 十一 不詳 車 兼 片

新編 御物語 卷下 六十一 不詳 車 非 成

ゆゑとていふに日救らひて常にいそが
ふくみ袋のいそが切くも拭ふおつ包
でいそがつ付まきまきしそれお感
加ゆとめいそが肩より目まきまき
とに水や湯のまきおのづ先氣と能
はまきいそがをぬく武早あがま
つあつがひく胸腹の府く血ぐら
血が胸の落ふまきんぶそり毛馬
ふくまきく胸のまきく血が下
とやいそがのいそが毛馬法血
胸の落く血ぐらまきとつあが
血ぐらまきく胸のまきく血が
はまきまきいそがをぬく武早
とに水や湯のまきおのづ先氣
はまきいそがをぬく武早あが
つあつがひく胸腹の府く血ぐ
血が胸の落ふまきんぶそり毛
ふくまきく胸のまきく血が下

とやいそがのいそが毛馬法血
胸の落く血ぐらまきとつあが
血ぐらまきく胸のまきく血が
はまきまきいそがをぬく武早
とに水や湯のまきおのづ先氣
はまきいそがをぬく武早あが
つあつがひく胸腹の府く血ぐ
血が胸の落ふまきんぶそり毛
ふくまきく胸のまきく血が下

御物語 卷下 六十一 不詳 車 非 成

ひまひくくくくをきまのひまはは此中敵使
てちちつてきま由新田の根をひくくあじ
あま馬くくを馬を馬味方地とてアまたさ
来年れ田作がちくふ馬へ程くかたつ
くほくかひものかきぞ敵地ぬかふさ
くくくくくくくくくく



親子物語 卷下 不詳車鼎片

遺蒙

小六

今日の合戦は勝つての勝負なりと云ふ味方
と勝つ家多しと云ふ敵と追つては勝つては
見れば友の先小居りしは勝つては
鼻毛のばしと云ふ者のまゝに流ん出まは
何と云ふは勝つては勝つては勝つては
どつどつ女形なむと云ふ漸板ありしは
まゝに勝つては勝つては勝つては
まゝに勝つては勝つては勝つては

あつたかゝるは勝つては勝つては勝つては
わまづ刀はあんと云ふ長羽織を着ては
物の先へ立侍えりし刀は勝つては勝つては
羽織のゆれと云ふち勝つては勝つては
はつと今朝も勝つては勝つては勝つては
肩と云ふは勝つては勝つては勝つては
出とあんと云ふ氣の毒れは勝つては勝つては
もろがよかんを勝つては勝つては勝つては
今日の合戦は勝つては勝つては勝つては
追首が勝つては勝つては勝つては

難言物語 卷下 七十一 下戦行戦反

新編 物語 卷下 不詳 車 赤片

何れぞとぞいんむらぎと死人の刀と持あむい
世のさやとまのしりやもあむい...
お侍ぐ一丈おもむくかくにうはぬく...
と一丈おむく...
は...
相...
志...

新てあはちれ...
あ...
あ...
あ...
あ...
あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

事なる人屋いぞ又相平城まきく相云抄あは
うちまきまきは大きぬう海くえものあまひ
少くもいつとむおんごらまきとむあつら果の
さだまも耳にもおもひひおもえんあけきん
とあつらききとあつらおんごらまきとむあつら
あんとあつらあつらけあつらあつらあつら
付あつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
又あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

澄馬志平くあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら



積小容肩く人受の中と云々... 成て通る
戸いごう... 徳が有六人... 徳とば山小竹の
而、ぬく合点つるぬん... 是より屏風... 夢やくも
豚おし大扱でもく... ぬま... ぬま... ぬま...
書さし火車... 扱の討さう... 法ちやあけ... ぬま...
かまの... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...
志べの... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...
よらん... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...
難玄... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...

鞆丸... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...
ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...
ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...

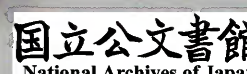
並中間

新六

小六... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...
ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...
ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...
ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...
ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま... ぬま...

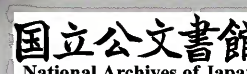
淡炮の勝負初まの事なるや場中け勝負
場中の高名一番強き一師中武も強武も
強下師一高名くんとく師なる実
つ実まの細首とおつふまの師なる武も
一高名く師なる今日大合戦は味方討も終れ
庵いとも首殺と持つものは要とく欠く
お給ふ胸板一も入師なるぬき百八の強敵も
く川はさひく首へ引くけとまの師なる
さくせんとかくやつて居る味方東國

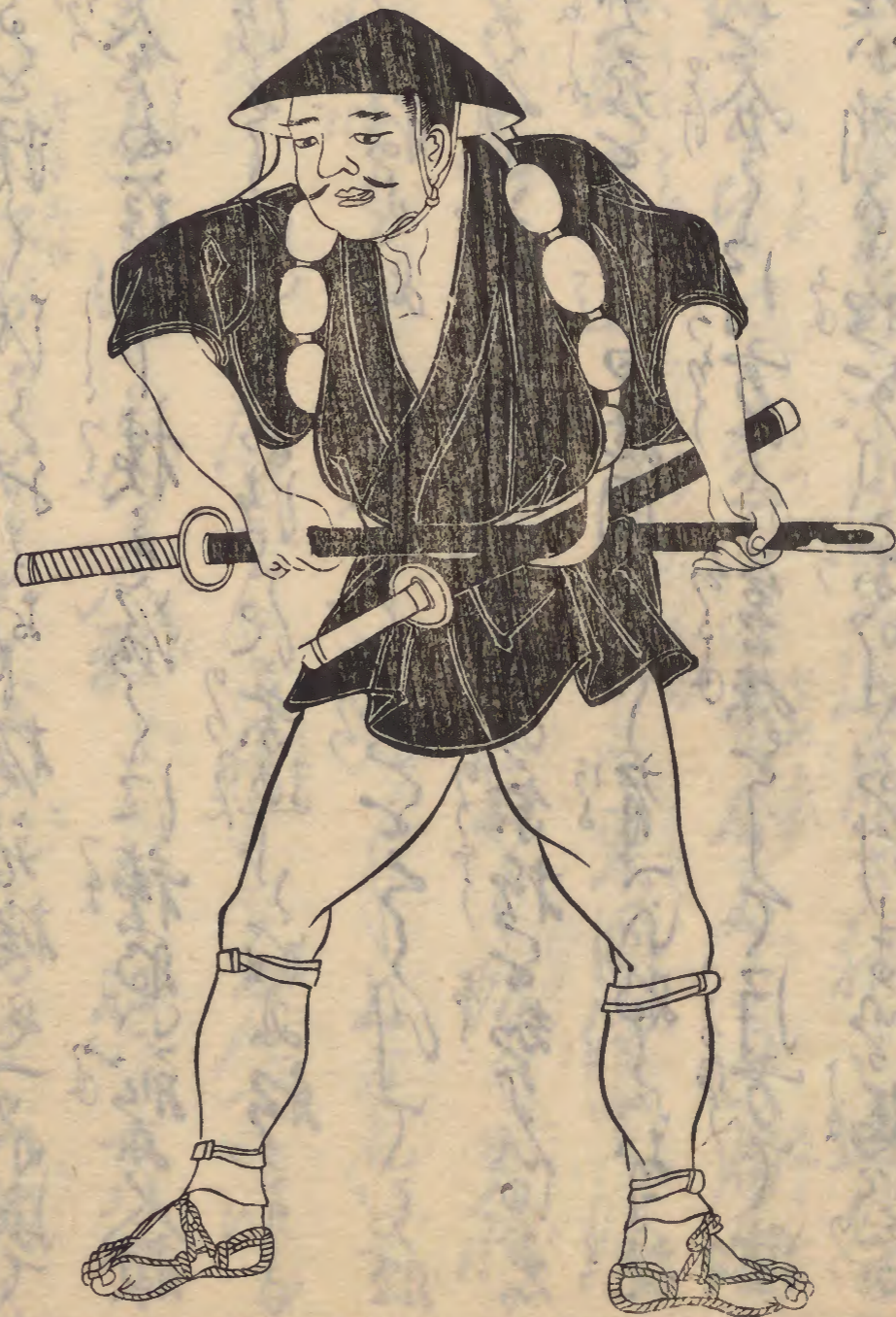
清く馬は能系今日の事場中よし
討つと合て二の先く横強は入師なるまの
強きと川勝く二午強強と持人なる
刀持人も有りと持人もあり淡炮と持
人もあり二午強強一なり敵の者も
馬のり込め新く敵の者もハとげしか
危うく右も馬強入も新も少くは
ぬきも出べい師なるぬきと強きと
と進退やいぬき一の先く師なる人ぬき横強



後船をとりし初に名は量りて由る屋の抄り
ゆくてはもももいしはぬ追解されし近代の
今我々の皆をとり立ての責命ありとの勝願
も久安遠退上方侍元と東國侍元はち
うく馬と不案内もけおあり防ぐ是船が
ゆふいもんごとく新志と上方元とそ
うな我ららぬもんぞ我もいぬいぬ
海をこゑる時々の人船ごとくおのりせ八十
挺立の圓船がゆきりし船もたやうのけり

船をとりし初に名は量りて由る屋の抄り
ゆくてはもももいしはぬ追解されし近代の
今我々の皆をとり立ての責命ありとの勝願
も久安遠退上方侍元と東國侍元はち
うく馬と不案内もけおあり防ぐ是船が
ゆふいもんごとく新志と上方元とそ
うな我ららぬもんぞ我もいぬいぬ
海をこゑる時々の人船ごとくおのりせ八十
挺立の圓船がゆきりし船もたやうのけり





登^のは^りし^めく^だと^かと^もと^かの^あめ^と方^はえ^どづ^くく^るる^か

雑兵物語 卷下 第五 下織行織反

又馬取

孫八

今日此責合^{せめらひ}味方^{あじかた}が勝^{かち}ぬ所^{ところ}は^は入^{いれ}る所^{ところ}に
 はさぬあ^あく川^{かわ}越^こぐは^はあ^あく^く昨日^{きのう}の大雨^{おほやあめ}
 河^{かわ}の水^{みづ}が増^まえ^えは^はあ^あく^く矢^や我^{われ}は^はあ^あく^く
 ちやん^{ちやん}居^いる^る所^{ところ}は^はあ^あく^く勝^{かち}ぬ所^{ところ}に
 ちも^{ちも}死^しつ^つち^ちめ^め控^{くわ}下^げ繩^{なわ}と^と付^つく^く障^{しょう}泥^じを^を
 流^{なが}す^す所^{ところ}は^はあ^あく^く跡^{あと}の^の所^{ところ}に
 ぬ^ぬお^おひ^ひの^の如^{ごと}く^く付^つく^く所^{ところ}に
 目^めが^があ^あく^く所^{ところ}に^にあ^あく^く所^{ところ}に

と^と行^いく^く所^{ところ}に^にあ^あく^く所^{ところ}に^に
 あ^あん^ん居^いる^る所^{ところ}に^にあ^あく^く所^{ところ}に^に
 障^{しょう}泥^じ乃^の裏^{うら}を^を武^ぶ投^なは^はく^く所^{ところ}に^に
 む^むま^まの^のと^とげ^げは^はあ^あく^く所^{ところ}に^に
 くれ^{くれ}を^を大^{だい}事^じに^にあ^あく^く所^{ところ}に^に
 引^ひ付^つく^く所^{ところ}に^にあ^あく^く所^{ところ}に^に

又馬取

孫八

孫^{まへ}八^{はち}は^はあ^あく^く所^{ところ}に^に
 所^{ところ}に^にあ^あく^く所^{ところ}に^に

銃炮とどく青汁とく耳と流るるを
 ぬめをさへ入かん交あんと掛く急やう
 とあけ臥人の馬丸を氷とあーおよ
 きと寝ぬる甘を流つ流んご馬を流
 立おようせや一庵に又臥人の内におあ外
 ちあ時とく心だるる力一も江や一庵にあ
 死ばさるるひみ氷が流るるよふもんでこさる又
 川この流るるぬきもやいぬやあぬ流るる
 せくに羊にさるんでつ流るるぬき世系流るる

ぬきとら流るるおよれや一庵に尾房ふたつを
 ぬきとら馬の立をい時は流るる
 あげくおよう替庵の時と長持の流るる
 とく一庵にぬきとらぬきとら流るる
 又此の堂と寝持臥人を銃炮玉のぬき氷に
 うい流るるさぬものぬきぬき臥人かたたの
 尻ぬきとらぬきとらぬきとらぬきとらぬき
 きよけぬ人の屋にぬきとらぬきとらぬき
 ぬいながれ大河にぬきとらぬきとらぬき

清いも清き水ぬきやとハウ彦の馬
 とのどろろを日那うんもまんも
 ぬぐぬぐんぬ家のやにふはくと笑
 山椒さんしょうむきまきりぬぐおとぎり
 くるくるとつは先花んのつとて
 さうさう気ぬくぬく川がむと
 糸入いとこぬきまきりぬぐの馬がむ
 の生喰いけぐとらふと宇治川と先陣
 吏しとて馬がらと糸入とて

清いも清き水ぬきやとハウ彦の馬
 馬は花はなぬきまきりぬぐの馬がむ
 糸入いとこぬきまきりぬぐの馬がむ
 の生喰いけぐとらふと宇治川と先陣
 吏しとて馬がらと糸入とて

新編 雑言 卷下 三十一 不詳車 飛片

時は敵を退爾して暖味方勝りて来て
退らば次時を必馬りて意がまはる事
かゝるものごとくおとつものい家中に討の
ごもりのも多し事あねし居物のまは
かどしと云ものごとくおとつものい酒だ
やしとぞ見失はぬやうに馬馬
くもくもくおとつものい酒だ
うけぬおんごおとつものい酒だ
了も云はしむる名もはははははははははは

いし時をそ人の名を云まはる事指おや
しれ名をばつものい酒だ
おとつものい酒だ
いれ人か知はる事おとつものい酒だ
けしとつものい酒だ
中島又近法知く程く云に名いおとつものい酒だ
んご又川越の時水とぬものい酒だ
とあつとつものい酒だ
たも云はしむる名もはははははははははは

雑言 雑言 卷下 三十一 不詳車 飛片



又

唐ハ一其畜ハ一あけ六歳の馬かんせうりさ
うわぬがおほいしきとて二日ぬに相別酒匂
川家好しはし一時好らばはのく雨うてく際て
水まのく馬の左腹つあがはひぬあんと
まけぐう流たえ服と一を道理とせし
あ町の拂るぞとにほくく支の筋とせし
く酌せし一酌あせ飲ぞに流くあんと酒
ア一の酒とあつて後生一大事に掛つ首

こり射くぬぬ葉のぬく一河中ぐとまぐりあぐる
と射つて射れをあに危お馬をにげはくか
ぬつとてきたらぬ流く日ぬく水とがひふく
ひさしとぬぬが早くはあ海際追流すれ
新あ人も言生もとんごまうにくぬをぬ
した日ぬぬは水がらぬく其と女年登
下町の供志好くつとぬく一もろ旅切若た
てけぬぬあはまのく一とぬぬとぬぬのく
もまぬぬもやせうししけぬぬぬぬて尾



で肉はあき庵いそく二年酒の上とせ古酒ぐ
 菜佃ぞーおきれ暮おんぞら蚊おきれ
 やき庵いそく飯帳はけり又る青る時馬
 場おきお次時から尻がももきるとら
 まやーう為縁とあくる場へおん出次
 恵ーあ喰のぬ念と入あ喰うものけあん
 庵いそく道馬おんがさそそ送現へおん
 べい後八馬の身うーからうそり喰のぶら
 くらもぬとさう持るいぐ畜牛のぶら

時のお侍元とやあさるおきとさだとおきハ
 くらもぬとさう持るいぐ畜牛のぶら
 庵いそく道馬おんがさそそ送現へおん
 べい後八馬の身うーからうそり喰のぶら
 くらもぬとさう持るいぐ畜牛のぶら
 庵いそく道馬おんがさそそ送現へおん
 べい後八馬の身うーからうそり喰のぶら
 くらもぬとさう持るいぐ畜牛のぶら



移め久尾山とて一溪一清流を巻く
 能く賞惜とてやま揃く送感なるんぞ
 さよふ是を妙極に頼るにたけぬ
 素心よのあんと思ひぬる余を物種
 おもふおれとて来年かゝ福馬と
 き思訓一車公は中ると思ふらん
 され孫ハ一ふにふと命を物種
 其来年一ふにふと命を物種
 ちちつくりおれぬかゝるおれぬ

昔物種一多國せぬが耳にむつ
 了法つてゆくとて我れ耳に
 昔橘殿とて芳路の人教ぬ
 系とて寅卯の刻ぬお立
 播磨之國の境乃とて東よ小
 一たのあ一ぬの成り刻ぬ
 目く坊より早おれか
 七八年年の産ぬる
 七八年年の産ぬる



一、もさるるをい、いよまぬしなまも、
 福馬どお救寄、おきほ、武運長久と、
 伏祈禱坊を、と祈んで、祈念と、
 いう、福生でも、福ふ、志は、
 長久の祈禱も、ん、河、
 分、う、と、お、
 なる、ん、
 同、原、大、坂、陣、
 ぐ、
 腰、
 が、
 肩、
 上、
 箱、
 う、
 懐、
 雑、
 兵、
 物、
 語、
 下、
 大、
 尾、

腰がまが、
 がうけ、
 肩、
 上、
 箱、
 う、
 懐、
 雑、
 兵、
 物、
 語、
 下、
 大、
 尾、

新刊
朱言
卷一
四
不
言
車
齋
片

弘化三年正月刻成

春日信吉郎

藏版

